仏文化 九州全体に

アンスティチュ・フランセ九州 初代館長に聞く

インタビューに答えるアンスティチュ・フランセ九州のフランシーヌ・メウール館長 （撮影・佐藤雄太朗）

九州でのフランス文化の発信拠点「アンスティチュ・フランセ九州」（福岡市中央区）が、九州日仏学館から衣替えして1日で2カ月。初代館長のフランシーヌ・メウールさんに、九州とフランスの懸け橋としての役割や今後の活動を聞いた。（坂井政美）

「外に出てイベントを」

―新しい「アンスティチュ」はこれまでの日仏学館とどう違うのか。

「フランス語学習をはじめ、文学、音楽、映画、現代アートなど、フランス文化を日本の皆さんと共有する場であることは変わらない」

「これまで東京、横浜、京都、福岡にある文化センターは、それぞれ独自の予算で活動してきた。今回、四つのセンターを統合し、ネットワークを強めることで、より多くの文化イベントを展開できるようになる」

―アンスティチュ・フランセ九州の役割は。

「福岡はアジアの玄関口に位置し、文化的にも多くの可能性がある。機構改革に伴い、福岡だけでなく九州全体に活動の場を広げたい。9月中旬の着任以来、県外にも積極的に出掛け、各地のパートナーとさまざまなプロジェクトについて話している」

―具体的には。

「アンスティチュの中だけでなく、美術館や大学、劇場、百貨店などと協力し、どんどん外に出てイベントを開きたい」

「関心の高いワインや料理、ファッション、映画などの講座を増やし、日本語でフランスの文化に気軽に親しんでもらう機会を提供したい」

◇ ◇

メウールさんはパリ出身で、パリ第一大学で美術史を専攻した。フランス外務省の文化担当としてシンガポール、バンコク、ソウルなどで勤務。パリに娘を残し、夫と福岡に来た。趣味は旅行と料理で、日本食も時々つくるという。